海外とは日本人にとって何か

経済最前線をゆく

城山三郎

文春文庫 139-12

海外とは日本人にとって何か

定価はカバーに表示してあります

1985年12月25日　第1刷
1986年7月30日　第2刷

著　者　城山三郎
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-713912-X

文春文庫

海外とは日本人にとって何か

経済最前線をゆく

城山三郎

文藝春秋

海外とは日本人にとって何か／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

大地燃ゆ〈イラン〉 9
火傷（やけど）の国に生きて〈アラブ首長国連邦〉 36
さいはてからのコンコルド〈オマーン・バハレーン〉 57
英国病の病床にて〈イギリス〉 75
ECで見た日本の魔法〈イギリス・西ドイツ〉 94
熱き血の人々〈メキシコ〉 113

大統領の城下町にて〈アメリカ・アトランタ〉 137
眠れる巨獣の目ざめ〈アメリカ・東部〉 151
オーロラ降りそそぐ下で〈カナダ〉 193
インディアン墓地の落日〈カナダ〉 218
闇深き谷間より〈カナダ〉 236
結びに代えて 249
文庫版のためのあとがき 258

海外とは日本人にとって何か

大地燃ゆ〈イラン〉

大安の日曜日、羽田を発った。

イラン航空八〇一便。行先はテヘラン、北京経由の直行便である。中近東へのルートは他にもいろいろあるが、とくにこの便を選んだのには理由があった。

ひとつは、「中近東へのビジネス特急」と宣伝しているように、最短距離を行くため、かなりの時間節約になりはしないかと思ったこと。北京経由で中国大陸を横断してとぶということにも、何か新鮮な発見がありそうな気がした。それに、産油国の王者イランのエアラインであるところから、機中でも石油成金の姿を観察できるかも知れぬという期待。このため、ファースト・クラスにのりこむことにした。

ところが、この期待は、二つともはずれた。

夕方、予定より半時間おくれて離陸したボーイング７０７型機は、夕日を右側から浴びなが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ら、とび続けている。北京へ向かうなら、夕日を正面から浴びてとぶはずではないのか。

西へとばずに、一度は南へ下りたわけで、この遠回りのため、一直線なら三時間足らずで着くはずの北京まで、四時間四十分かかった。スチュワーデスにたしかめたところ、やはり、上海近くへ出たあと、反転して北京へ入るコースだそうで、原因は、韓国の航空識別圏を避けるためということであった。目に見えぬ政治の壁がたちはだかっている。

漆黒の闇となった大陸に、ほのかに集落の灯が見えてきた。つつましい生活を反映して、きらめくというより、かすかににじむような灯である。

もっとも、北京空港の建物には、ネオンがあった。一面の闇の中に、マルクス・レーニン主義と中国共産党をたたえる文字が赤くきらめき、毛沢東の巨大な壁画が照明に浮き出ている。

給油の時間、がらんとしたターミナル・ビルの中に入った。十年ほど前北京を訪れたときと同じ建物に思えたが、売店が開き、灰皿や酒、花瓶などを売っている。夜のせいもあって、広い待合室には、工人服姿の中国人がまばらに居るだけ。それに、中国人一人が見送りに来ている数人の大男の白人グループがあった。

一時間ほどしたとき、工人服姿の小肥りの女が寄ってきて、

「飛行機に乗れ」

とだけいった。これも一種の公務員なのであろう。無言で客たちを引率し、飛行機の下へ。そこで、片手をポケットにつっこんだまま、客から搭乗券を受けとる。

再搭乗して、機内を見回す。

ツーリスト席では、それまで多かったビジネスマン風の日本人客が、かなり減っていた。ファースト・クラスには、空港待合室で見かけた数人のグループがのりこんできた。二メートル近い大男、そろってひげをはやし、共通して、ややまるみを帯びた大きな鼻、下り眉、どんぐり眼。愛嬌のある顔でもあるが、これがイラン人に多い風貌のようであった（もともと、イランに多いのは、アリアン系人種で、同じ中近東でも、アラブとは人種を異にしており、アラブと一括されることをきらう、という）。

男たちは、四十前後。もちろん、石油成金のようではない。土産物が多いので、航空会社関係の人間でもない。中国とイランの間でどういう交流があるのか、技術者か役人といった風であるが、最後まで素姓がつかめなかった。

素姓がわからぬといえば、背広姿の別の大男が、ときどき客席を見渡して歩いて行く。そうかと思うと、その男が操縦席のすぐ後に屈みこんでいたりして、不気味であったが、私服警官とわかった。

窓の外は、闇が続いた。イラン発東京行きの便も、中国上空を通るのは、やはり夜間であって、空から中国大陸を眺めることのできぬ仕掛けになっているようであった。

北京から八時間あまり、さらに夜ばかり続き、テヘランに着いても、まだ夜明け前であった。

夜ばかり続く旅というのも、意外に神経が疲れる。

イランは親日的で、テヘラン空港も、日本人はほとんどフリーパスときいていたが、この日は、スーツケースをあけさせられた。赤軍派の動きが伝えられ、中近東一円に警報が出ているらしい、ということであった。

この種のことは、珍しくないらしい。とばっちりを受けて、ある商社の若い社員は、カイロへ出張したが、入国できず戻されたし、別の商社では、日本からの新任の駐在員が、赤軍派の一人の手配写真と本人もびっくりするほどよく似ていたため、そのまま警察へ連行され、容易に釈放されなかった。

首都テヘランは、海抜一二〇〇メートルの高地に在り、雪をいただいた山々が目の先に迫っていた。広い並木道もあるかなりの近代都市で、人口約四百万。さらに膨張を続け、周囲の灰褐色の台地では、ビルや住宅地の建設が、ゆったりした速度で進んでいる。

交通機関は、車。高速道路であろうとなかろうと、車は猛烈なスピードで走る。交叉点など、鼻先で突き合わんばかりである。

「野性の目でにらみ合って、ひるんだ方が負け」とは、ある駐在員の解説。しかも、車のナンバーは、みみずのおどったようなペルシャ文字だけ。事故や事故処理がこわいので、自分では運転しない駐在員が多い。

日本車も見かけたが、ベンツが目立つ。工業化を推進しているので、国産車もある。世界中から選りどり見どりで部品を集め、工程は組立てと塗装ぐらいといわれるが、とにかくその「国産車」保護のため、完成車の輸入には、高率の関税がかけられる。

それでも、結構、外車が売れる。イラン人は、ペルシャ帝国の昔から、誇り高い民族。見栄のためというか、面子を重んずるせいだといい、また、一方、インフレが進んでいるので、三年五年経っても、外車の下取価格が落ちないためともいう。

イランなどが引金をひいた石油ショックだが、インフレは産油国にもはね返って、物価騰貴が続き、とくに人口集中のはげしいテヘランでは家賃が高く、給料の半分を家賃に割いている駐在員の例もあった。そのため、苦労の多い海外生活で、さらに赤字がふえるとは、割りに合わぬ話である。

わたしが泊っていたのは、Hホテル。

イランに限らず、中近東では、航空機やホテルの予約が当てにならない。世界中から人々が殺到してきているため、予約はいつも定員超過である。このため、予約した宿へ着いても、ことわられる。たとえ詰め寄っても、

「あの時点では部屋があったから、予約はたしかに受けた。だが、いまは部屋のないことがたしか。だから、泊めようがない」

などといった答が返ってくると、わたしは出発前におどかされたが、幸い、わたしも同行の

A記者も、一度もその種の憂き目を見ることなしで済んだ。

Hホテルは、まだ新しく、なかなか快適なホテルであった。水の乏しい土地なのに、植木にとりどりの花を咲かせ、大きな鳥が舞っている。夕方から夜にかけては、バーやロビーに客が溢れた。

ただ困ったことは、電話がかかってきて、受話器をとり上げても、なおベルが鳴りやまないこと。それに、エレベーターの一台が、一〇センチ幅ぐらいしかドアが開かず、あとは手動で押し開けねばならなかった（もっとも、この種のことは、その後、アラブ諸国だけでなく、ヨーロッパのホテルでも、しばしば経験した。むしろ、日本の設備の良さに、あらためて感嘆すべきかも知れない）。

空気が乾燥していて、ドアやスイッチにふれる度に、火花が散る。比較的、雨や雪の多い冬から早春にかけても、湿度は三〇パーセント。五〇パーセントを割ると異常乾燥注意報が出る日本のことを思うと、常時異常乾燥である。夏にはさらに乾燥し、湿度は一〇パーセントを切る。唇が割れ、マージャン・パイまで割れるので、冷蔵庫にしまっておかねばならない。イランのひとたちが、濃い紅茶を一日十杯以上のむのも、生活の知恵である。

街角や人の集まるところには、国王夫妻の写真が目につく。国王は、若き日の明治天皇といった風貌。美しい王妃は、社会福祉施設の視察などに忙しく、毎日のように、新聞に写真入り

で出ている。国民のアイドルに、という意向もあるのであろう。

イランの人口は三千五百万。国土は日本の四・四倍だが、砂漠などが多く、灌漑の助けを借りても可耕地は一〇パーセント程度。

史上、二度にわたって、ペルシャ帝国として栄えたあと、アラブ、トルコ、モンゴルなどの異民族に侵され、さらに、ロシヤやイギリスの経済支配を受けたが、これをはね返したのが、コサック騎兵将校であった現国王の父君である。ただし、第二次大戦中、イランが中立政策をとっていたにもかかわらず、ソ連とイギリスの侵入を受け、この先王はイギリス軍に軟禁され、非運の死を遂げた。

代って、当時二十二歳であった現国王が即位。国会の反対を押し切り、国会を解散してまで、農地改革を強行。その後も、「白い改革」と呼ばれる経済開発、教育の普及など、一連の近代化政策を推し進めてきた。

世界をさわがせた石油国有化も、そうした政策の一環で、国際石油資本に挑戦したイラン国営石油会社（ＮＩＯＣ）が、いまや自ら石油の開発から販売に至るまで、大きく手をひろげている。

日本の原油の四〇パーセントは、このイランから来る。このため、両国間貿易では、日本側の大幅入超となる（もっとも、この原油の多くが、メジャーの手を経るというので、イラン側は対日本輸出額に計上しない）。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com